アメリのラブレター
- It's happy days -

アメリのラブレター

『アメリカのラブライター』

恋が成就する瞬間を、河合アメリカは目撃した。想像していた以上に感動するものだと思った。

彼女がラブライターを読み上げながら涙を流す。

聞く方も涙を流す。

見てるだけの第三者も、涙を流す。

それを見て、アメリカも涙を流した。

ぼろぼろと止めどなく涙は流れ、我慢した分だけ鼻からも流れ、ひつくひつくと息をするのも危ういくらい泣いた。

相思相愛なのは、今までの流れから分かっている。

二人が結ばれるその締めとして、彼女の方がラブライターを書いて彼に読み上げたのだ。

なのに応龍は、白けきった視線をアメリカに向けた。

「お前エ、何泣いてんだ？」

「感動するでしょ、普通」

「はん、しねえよ」

情緒の欠片もない返事をする応龍を、アメリカは無視して目の前に起こってることに集中する。そして、テレビでやっている番組を見ながら、アメリカは思わず呟いた。

「やつぱり、恋っていいなあ……」

人騒がせな事件は、ここから始まったと言っていていいかもしれない。

その日の夜、裕理が出かけていたので、アメリカは話し相手に応龍を家にあげていた。

太転依は食事をしないが応龍は酒を好む。正確には酒の気を飲み、酒気で酔う。だから奇をてらわずに酒で応龍を誘った。

「ヨリトモ、さっきの番組、感動してなかったけど、ラブライター知らないの？」

家にあつた玄造秘蔵のブランデーを振る舞われ、満足そうに杯を空にする応龍が答えた。

「恋文だろ？ オレも昔もらったことがある」

「え？ ヨリトモが？ うっそー」

「バカにすんな。昔からオレにいい寄る女は多かった。おまえのようにな」

「ああ、なるほど。あたしみたいに飼われてたのね。ヨリトモって見るからに甲斐性なしで構ってあげないとなあつて思わせるのかもねー」

「ンだと？ 聞き捨てならねーな」

応龍はギロリと睨むが、アメリカはタイミングを外すようにお酌をする。

「でもさ、ヨリトモって太転依でしょ？ 恋文もらつてうれしかった？ 送られてきた恋文をどうしたの？」

「別に嬉しかねえよ。適当に返歌したさ。雅^{みやび}過ぎてミーハーな女どもにオレの器量は理解できなかったがな」

不機嫌そうに言うものの、口元は得意気に微笑んでいる。

「なるほど。愛想尽かされちゃったんだ。よしよし。お酒でも飲んで気を紛らわそう。あたしが

つきあってあげる」

「いちいち勘にさわる言い方するな、お前。だから八衢ともチンタラするハメになったんだ。少しは自覚しろ」

応龍の言いように、アメリカは頬をふくらませてみせた。

「自覚してるよ。だからヨリトモに聞いてるんじゃない。女心は秋の空って言うけどさ、男心だつて変わりやすく見えるのよ。で、恋文貰つて本当に嬉しくないの？ あたしだったら嬉しいけど」

「オレほどの男になるとつて話だ。凡夫なら恋歌一つでコロリだろ」

「なるほど。嬉しかったのね……うん良かった良かった。それじゃさんちゃんとかなら簡単に落とせそうね」

「さんちゃん？ あの八衢とつるんでる奴か？ 何であいつの名前が出てくんのだ？」

「あ、でもヨリトモつて意外と惚れっぽそうだからなあ……ここはやっぱりさんちゃんにも聞いてみよつかなあ」

アメリカに質問を無視され不機嫌になった応龍は、ブレンダーを瓶ごと空にして立ち去ってしまった。

平日の昼休み。裕理は用事があつて学院にいない。

アメリカはチャンスとばかりに三九郎に質問した。

「ねえさんちゃん。愛の告白つてやっぱりラブレターだよねっ」

手にしたおむすびをパクつきながら、めんどくさそうに三九郎は応える。

「なんや唐突やな……ラブレターか……ま、順当に行けばそうなる場合も多いやろな」

パクついているのは、アメリカが作ってきたお弁当のおにぎりだ。裕理のために作ったものだが、ここぞとばかりに三九郎に振る舞っている。美味しそうに頬張る彼に、アメリカは水筒の蓋に冷たいお茶を注いだ。

「さんちゃんは貰つたらやつぱり嬉しい？」

三九郎はコップ代わりの蓋を受け取つて、応える。

「そりやま、嬉しいに決まつとる。つて、何でそんなこと聞くんや？」

質問した後、お茶を一気に飲み込んだ。その姿を眺めながら、アメリカはちよつと困つたような仕草をする。

「いいえー、別にー」

「なんや？ 気になるやないか」

「ちよつと聞いてみただけだから。気にしないでよ」

「んなこと言われてもなあ」

「ほらほら、まだまだあるんだから食べて食べて。お腹いっぱいになつてないから、細かいことも気になるじゃない」

手作りであろうおかずの入ったタッパーを、三九郎に差し出す。三九郎は少し困つた顔をするが、タッパーに入つた唐揚げを見てまんざらでもない顔に切り替わつた。

「ま、今日は午後から授業さぼつて練習やからなあ。ありがたくいただきます」

「うんうん。ありがたく食べて」

和氣藹々な二人は、予鈴が鳴るまで食べて話していた。

その様子を、ましろは偶然にも目撃してしまった。彼女の常人離れた視界に、入ってきてしまった。

アメリカが愛情込めた手作りの弁当を、三九郎に振る舞っている。そして楽しそうに話している内容から、ましろは応龍から聞いたことを思い出していた。昨日の夜、ましろは太転依のトラブルを解決するために応龍らと一緒に出かけっていたのだ。

恋文について聞いたことと、その時に出了た三九郎の名前が、一つの答えを導いてしまう。

ひよつとしてアメリカさんは、三九郎さんに恋をしているのでは？

変な話ではない。常に一緒にいる男性に恋をしてしまうというのは良くあること。それは古今東西の物語が証明している。

しかしそう断じるには躊躇ちゆうちゆうしてしまう。相手は三九郎だ。裕理にとつても気の置けない親友だ。親友が言語道断たる浮気をしているなど、想像するに恐ろしいことと思う。むしろそう思い至る自分が恥ずかしいと。

しかし疑いは晴れない。状況証拠がましろにささやく。ネタは光っていると。

こんな時だからこそ、ましろは美冬やゆみなに相談したかった。しかし、それも無理と思う。親友を疑っている自分をさらすことになるからだ。

だからましろは自ら動く。

地上を闊歩する四足の獣の太転依の頂点たる者として。

「眷属たちよ。我が命を聞け！ 河合アメリカを監視せよ！」

ましろはアメリカの浮気を疑っていた。

ましろの命を聞き入れ、四方に散った太転依たち。

彼らの目は捉えていた。アメリカが文房具屋で封筒と便箋を買い、家でペンを走らせているところを捉えていた。

そして次の日の昼間、決定的な瞬間を発見した。

アメリカと三九郎だけが取っている講義が終わった後、休み時間にあつたことだ。

「これは……あん時言うてたラブレターか？」

「あつ、見ちゃだめだよ。まだ書き途中なんだから」

取り戻そうとするアメリカの手を、ひよいとかわして便箋の文面を読み続ける三九郎。

「なかなかいいやないか。これ読んだら惚れるで」

「ほんと？ さんちゃんなら惚れる？」

「バッチシや。クラクラする」

「えへへ。昨日、必死に推敲した甲斐があつたなあ」

「これを一日でか。なかなかの文才やな。今度作詞でもしてもらおか」

「ふっふっふ。さんちゃんのハートはゲットね！」

「お調子もんやな、アメリカは。ノせやすいわ」

満更でもない三九郎の態度。アメリカの喜ぶ姿。二人の様子を、ましろは千里眼と眷属達の補佐で確認していた。互いにふざけあっている様子だが、話している内容にはひしひしと友達以上の

ものを感じるましろだった。

ましろは確信する。

これは浮気の初期症状だと。早めに手を打っておくべきかもしれない。裕理がこれ以上傷つかないように、アメリカがこれ以上手を汚さないように、三九郎が裕理の親友であり続けるように、手を打つべきだと確信した。

そのために、ましろは動いた。

彼女はまず、フロアレスにいる裕理を知る二人の女性に相談するところから始めた。

その日の午後、放課後を少し過ぎた時間帯。

泉戸家のガレージにて、バイク相手に手を油まみれにしている最中、裕理は唐突に言われた。

「裕理さん。あなたはなんていい人なんでしょう」

「……何だかよくわからないけど、ありがとう」

ましろの悲壮な声に、裕理は目を白黒させた。

突然、すごい剣幕で現れたましろに、嘆くように裕理はほめられた。

「お兄ちゃん、いい人過ぎますっ。過ぎたるは及ばざるがごといですよ」

「う、うん。そうだね。気をつけるよ」

一緒にやってきたゆみなには、たしなめられた。

「まったく、君ってやつは……」

そして美冬には呆れられた。

本来なら校外に出ることが許されないフロアレスから、三人と一匹（鶴が美冬の足にへばりついている）がわざわざ出向いてきた。これは大事があったに違いない。しかもそれは裕理自身、自分に関することと、うすうす気づいていた。これで気づかなければどうかしている。ましろもゆみなも美冬も、何もなしに自分を責めるような言葉を発するはずはないのだから。

「それで、いったい皆さんおそろいで何用なの？ 太転依に関すること……じゃないよね」

当然の疑問を投げかけた途端、三人は顔を見合わせて口をつぐむ。

言いたくない。言いたくないが、わざわざ足を運ばざるを得なかったという心情がかいまみえる。これは話が長くなるのかもしれない。裕理はそう思い、家に上げようと思った。

「えつと、中入る？ お茶くらい出すよ。そろそろアメリカも来る頃だし……」

アメリカ、という言葉が出た途端、三人がキッと睨むように裕理の方を向いた。

「な、何？」

「裕理さん……可哀想に……」

「お兄ちゃんはこんなにつ、こんなに信用しているのにつ」

「一片の曇りなく、信じきっている」

「美冬、正直に言うたらいいぞ。ゆるみきつてるとな」

四人は顔を寄せあつて、裕理を無視して話し始める。

「ゆるんではいるが、それは裕理が彼女を信用しているからだ。断じて悪いことではない」

「しかしですよ、美冬さん。未来の夫たるもの、将来の妻の不貞は気づくべきではないでしょうか？ それが夫の器量というものです」

「ましろお姉様、お兄ちゃんにそこまで求めるのは酷ではないでしょうか？ お兄ちゃんはその

通り、バイクいじりにうつつを抜かして恋人の情動を揺さぶってしまった男です。マリー・アントワネットのフェルゼンに対する恋心に、鈍くも最後の最後に気づいてしまったルイ十六世のよ
うな人なんです」

「なるほど。それは言い得て妙だ。流石ゆみなだ」

「確かに八衢は主役にはなれそうにないのお。ルイ十六世が関の山じゃ」

「みなさん、それはヒドすぎます。ヒトは誰でも主人公ですっ」

「そうですよお。お兄ちゃんも素敵な男性です。ゆみなが保証しますっ」

「妹属性が言っても説得力ないぞ。十二人も妹がいるというバカげた事態でも状況に流されてしま
うような男を素敵と言っているようなものじゃぞ」

「鶴の十二人の妹は、なんのことやらさっぱり分からないが、とにかくさんざんことを言われ
ていると裕理は理解した。」

「あー、みなさん。いったい何なんですか？ 時と場合によっては、いくら穏和な僕でも怒り
ますよ？」

裕理の声に、四人が振り向いて睨む。

何故、ましろとゆみなと美冬がわざわざ八衢神社くだりまでやってきたのか。それはこの男
を心配してのことであり、友を糾弾するためでもあったのだ。それは慈しみも含んだ、正当な怒
りなのだ。

その問題の男が、怒りますよと言う。彼女らは睨まずにはいられない。

彼女らの視線は、裕理の怒りをあつさり霧散させ、心を動揺で占拠した。

「あ、うそうそ。怒ってない、怒ってないよ。ただいったい何の話してるのか聞きたいなっ
て思っ……」

再び、四人は顔を見合わせる。そして四人そろって頷きあう。四人のうち話すのはやはりま
しろだろうと、暗黙の了解の元、ましろがずいっと前に出て、裕理は思わず後ずさる。

「裕理さん。ことは急を要します。だから単刀直入に申し上げます」

え？ 急を要するなら何故今の今まで井戸端会議みたいなことしてたの？ と疑問に思うが言
えない。有無を言わさぬ雰囲気は漂っていたから言えない。

「アメリカさんは、裕理さんの恋人ですよね？」

「……う、うん。そのつもりだけど」

「つもり？ だからです。だからアメリカさんは裕理さんから離れていってしまったのですっ」

「え？ え？」

「裕理さん。アメリカさんは浮気をしています」

「……へ？」

「しかも相手はあなたの無二の親友、要三九郎さんですっ」

「……はい？」

裕理は、目をぱちくりさせた。

「驚かれたことでしょう。私が何を言っているのか、理解できなくなるほど、ショックを受けて
いらっしやる。それは分かります。分かりますが、事実を受け止めてください」

首をかしげる裕理を見て、ゆみながましろの腕をとる。

「ましろお姉様、やっぱりお兄ちゃんに直接言うのではなく、アメリカお姉ちゃんに告げてから
の方がよかつたのではないのでしょうか？」

「いえ。夫たるもの、妻の不貞も受け止めねばなりません。それが夫婦のちぎりというものです」

「しかしだ、ましろ。この通り裕理は、友人と恋人の関係にも気づかなかったわけだから、いきなり受け止めるというのは酷だったのかもしれない。もう少しやんわりと伝えた方が良かったのではないか？」

「それでもつ。涙を飲んで受け止めなければならぬ。恋とは、愛とは、そういうものではないでしょうか。とても心が苦しいものではないでしょうか」

「わかります。ゆみなもわかります。しかしつ、それでもあまりにもお兄ちゃんが可愛そうで

……」

「ちよつと、ストップストップ」

再び四人で額をつきあわせて話し出そうとするのを、裕理は体を張って止める。

「アメリカが浮気？ 相手が三九？ 何言ってるの？ あいつらに限ってそれはないよ」

裕理はふうとため息をついていた。何を言い出すのかと思つたらそんなことかと、安堵の表情をし、それから少し困つたなあという余裕のある呆れ顔を皆に向けた。

「驚いたよ。いくら何でもそれはない。フローレスと言えど、やっぱり女の子しかないと変な方向に想像力が働くのかなあ」

「言い切れるんですか？」

冷たく鋭いましろの声が、裕理の乾いた笑いを打ち消した。

「……何が？」

「三九郎さんと、アメリカさんが不埒な恋に至っていないと断言できますか？」

「だつてさ、三九郎の好みは知ってるし、アメリカとは幼なじみだし、あり得ないって」

「今までずっと、子どもの頃から両想いだったのに、すれ違ってトラウマになつてのは、どこの誰ですか？」

「わつ、わわつ！ それ言う？ そんな簡単に古傷えぐる？」

「ほらつ、まだトラウマじゃないですか！ 精神的外傷じゃないですか！」

「そ、それとこれとは関係ないだろつ。ウチに来た理由つてそれか？ 冗談じゃない。人んちのプライベートを見せ物扱いするな」

「なんですつて!? 私たちは裕理さんが心配でやつてきたんですよ！」

「わしは、楽しそうじゃから来たぞ」

「鶴。それはよくないぞ」

「何でじゃ？ 楽しそうじゃつたぞ。実際楽しいものが見られて、わしはうれしい。とてもよい神気が得られた。お肌つやつやじゃ」

「ほら、ほら。鶴は正直だ。とても潔い！ 自分たちの野次馬根性とか、覗き見根性を正当化するのとはエライ違いだ！」

「聞き捨てなりませんつ！ 私たちは裕理さんも、アメリカさんも、三九郎さんも、みんな幸せに暮らせるようにと思ひ、糾弾しにやつてきたのです！ それを野次馬根性などと言うなんて……」

目を真っ赤にしているましろに、裕理は少し腰が退く。普段から押しの弱い裕理に女の涙は靨面に効く。それでも裕理は退くに退けない。

「そ、そうだ。証拠は？ アメリカが浮気してるつて証拠。三九がアメリカとできてるつて証拠。そ

れないと、とてもじゃないけどただの中傷にしか聞こえないよ」

裕理の一言で、ましろはピタリと泣き止む。代わりに顔に張り付くのはしてやっつたりの笑顔だ。「証拠？ そんなに証拠が見たいのですか？」

我が意を得たりとましろの鋭い視線が裕理に注がれる。射すくめられる裕理は、ごくりと生唾を飲んだ。

「そ、そうだよ。それがないと話しにならないからね」

「よろしい。では美冬さん、私はこの件に関して証人を用意しております。すぐにこの場にお連れしますがよろしいですか？」

「え……あ、わかった。証人の証言を認めよう」

「ありがとうございます」

何故、御白砂の金さんだったり、法廷の弁護士だったりしたら似合いそうなセリフを言うのか。それこそ人のプライベートで遊んでいる証拠ではないのかと、裕理は責めたい。責めたいが、言い出しにくかった。

「ただいま到着いたしました。証人のヨリトモさんです」

「おい綺久羅美。遊んでるなら帰るぞ」

泉戸家のガレージに現れたのは応龍だ。三強の一角でアメリの家に居候している。裕理と並んで、今のアメリを知るのに重要な人物といえる。

「証人は気がたっておりますが、これは義憤です。男として尊ぶべき義を逸した裕理さんに正義の怒りを内に秘めているのです」

イライラしつぱなしの顔をそのままに、応龍は裕理に寄ってくる。

「おい八衢、なんだこれは？ 何しに呼ばれたんだ、オレは？」

「僕だつて知らないよ。ましろに呼ばれて来たんじゃないの？」

「そうだが……綺久羅美、何か変だぞ？ 毛がずっと逆立ってる。あいつかなり怒ってるぞ。お前、何をした？」

「何もしてない、何もしてない。アメリが浮気してるつてましろが言うから」

「アメリが？ ああ、その件か」

「ヨリトモ。あなたがアメリさん浮気説の証人です」

ましろはビシッと応龍を指さすが、当の本人は不機嫌な視線を向けるだけ。

「は？ 状況が見えねえな」

「いいんです、あなたはそのままです。私たちが欲しいのはヨリトモのイエスカノーか、です」

「あ？ ンなこのために呼び出したのか？ 八衢に近寄ると気分悪くなるつて言ってるんだろ？ ンなこのために人を呼び出すなよ」

「ヨリトモ、あなたはアメリさんからラブレターについて聞かれましたか？」

応龍はめんどくさい半分、不信心半分くらいの態度で答えない。それに対してましろは地面を一発蹴った。

ドンツと音をたてて、地面が揺れる。

「お、お前つ。神通力使うようなことか？」

「神通力どころか、全ての力を使いますよ。ヨリトモ、あなたから証言を得るためだったら」
 応龍の眉間のしわがさらに増え、眉が釣り上がる。

「ンだと、こら。力尽くだと？ いきなり呼び出しておいて、それがヒトに……いやオレにも

を頼む態度か？」

「事は急を要します。致し方ない処置です」

ましろの有無を言わさぬ態度に、応龍の怒気はふくれあがった。

「らしいじゃねえか綺久羅美。昔つからそうだった。気にいらねエことがあつたら力尽く。てめえらしいぜ」

対峙するましろと応龍の間に、満面笑顔の鵜が割り込む。

「助太刀するぞ白い獣。蛇モドキから浮気の証拠を勝ち取ろうぞ」

「頼もしいです、鵜」

「おい童^{わっぱ}。お前が出る幕じゃねえから引っ込んだときな。子どもは子ども同士遊んでろ」

三強の二体と最強の太転依が、神気をむき出しにして対峙する。

その最中、美冬は鵜の着物の裾を掴んだ。

「鵜。これ以上騒ぎを大きくするな。おい、聞いているのか？」

突如始まった争いの前兆に、ゆみなはこの中で最も頼りになるであろう裕理の背中に隠れた。

「お兄ちゃん、どうしよう？」

「どうするも何も……こうなつたら三九を呼んで、真相を解いてやるっ！ それでいいだろっ！」

裕理もまた、瞳孔開いてテンパっていた。

「お兄ちゃん！ それでもし本当に浮気してたらどうするんですかっ」

「殴る！ きつと不倫の太転依が三九に取り憑いているんだ！ 僕の退魔の霊能で追い出してやるんだ!!」

「だ、だめですよ。ゆみなはこれ以上の荒事は見たくありませんっ」

「今ここで太転依ビッグスリーが戦おうとしてるんだよ、ゆみなちゃん。この葦原町でこれ以上の荒事は起こらない。僕が保証する……よーしっ、電話するぞっ。うお、携帯を操作する指が震える。こんなの初めてだ！」

「だーかーらー、止めましょうよ。うひゃく、たーすーけーてー、鳳凰さーんっ」

揉めに揉めて、収集がつかなくなっているこの状況を納める者は、もはや誰もいない。

ゆみながガレージの外へ飛び出し、鳳凰の名前を叫んだところを、物陰からこっそり見ていた人物がいた。

この騒ぎの話題の中心人物、河合アメリその人だ。

「何……これ……」

アメリは、わけがわからなかった。

彼女は推敲に推敲を重ねたラブレターがようやく完成し、裕理に読んで貰おうと持ってきたのだ。

これを読んで、喜ぶユウの顔が見たいと、浮かれ気分で泉戸家までやってきた。

そして来てみたら、何やらガレージで揉め事を起こしている皆がいる。

入ろうと思つたら、その揉めている話題の中心がアメリ自身と分かった。

自分の行動の何かが問題になっているようだけど、それがさっぱり分からない。

分からないからこの騒ぎに入っついていって、真相を確かめる勇氣もない。

ただ、これ以上に混乱しないことを祈りつつ、はらはらしながら様子をうかがうしかできない。アメリカはバッグから一枚の封筒を取り出して見つめる。

「もう……せつかくラブレター書けたのに」

そのラブレターこそ、この混乱の原因であることを、アメリカは知らない。

そして、上空から現れた鳳凰が巻き起こす風に、ラブレターは吹き飛ばされた。

事件の真相は風に消え、裕理が保証した荒事以上の荒事が始まった。

後に、この荒事は八衢神社四大太転依の争乱と呼ばれ、葦原町の人々に記憶されることになる。

〈おわり〉